

方言研究と昔話研究

——高田十郎の場合——

高木 史人

一、「小河」の人から「大和」の人へ

二〇〇五年の暮れのことだったろうか。畏友、森洋介から、高田十郎の伝記が出ているから取り寄せて勉強会をしよう、『なら』も復刊されたことだし、という誘いを受けた。それから年も改まりしばらくして、森に教えられた伝記著者の自宅に夜九時ごろに電話をしたが不在らしく繋がらない。著者は高齢だと聞いていたので、翌朝早く電話をしたらよからうとそうしたところ、繋がった相手は家族ではないらしく、背後で何やらがやがやと話し声が聞こえる。まもなく著者の夫人が電話口に出て、主人は今朝方死にましたと言う。慌てて、こちらの用件を手短に言い、改めて連絡を入れろと伝えて電話を切った……。そんな経緯で入手したのが、平井漠著『相生市の生んだ民俗学者高田十郎』（二〇〇三年、自刊）である。著者の平井漠は一九一八年生まれ、兵庫県赤穂郡上郡町に住まった郷土史家で

ある。なお、高田十郎の謄写版個人雑誌『なら』がクレス出版から三巻本として復刻刊行されたのは二〇〇四年だった。

そうして、二〇〇六年五月に口承研究会で高田十郎輪読会を開いた。その成果としては、すでに飯倉義之「高田十郎『随筆民話』を読む——世間話研究史として読む」、野村典彦「高田十郎『随筆 山村記』を読む」（ともに『世間話研究』一六、二〇〇六年、世間話研究会刊）がある。ここでは驥尾に附して、高田の個人雑誌『なら』にみられる方言研究と昔話研究との関係について、いささか記す。

平井漠の著書には、末尾に「高田十郎年譜」が付されている。それによると、高田は、一八八一（明治一四）年三月五日に兵庫県赤穂郡矢野村小河（現相生市）に光葉久吉・キリ夫妻の二男として生まれた。地元の尋常小学校や高等小学校を卒業、姫路尋常中学校に学び、地元の尋常小学校の代用教員となった。一九〇二（明治三五）年に高田万蔵・シヨウ夫妻（シヨウは高田が代用教員をした尋常小学校の裁縫科の教員だった）の長女

シズエと婚約して東京の早稲田大学の高等師範部に遊学した。一九〇四（明治三七）年に結婚して高田姓となり、一九〇七（明治四〇）年に奈良師範学校の教員になり、一九五二（昭和二七）年に七二歳で死ぬまで奈良に住まった、という。つまり、高田は、生まれてから三二歳まで生地に過ごし、遊学を挟んで、二七歳から七二歳で死ぬまでを奈良に過ごした。高田の奈良時代に、『大和の伝説』（一九三三（昭和八）年、大和史蹟研究会刊）、『法隆寺金石文集』（一九三五（昭和一〇）年、法隆寺鶴故郷舎刊）、『妊娠・出産・育児に関する郷土大和に於ける民俗』（一九三八（昭和一三）年、奈良県社会事業協会刊）、『奈良井上町年代記抄』『随筆民話』『随筆 山村記』（いずれも一九四三（昭和一八）年、桑名文星堂刊）、『奈良百題』（一九四三年、青山出版社刊）などの著作が刊行されている（このうち『随筆民話』は、柳田國男の序文が付されている）。

この他に、謄写版の個人雑誌『なら』が大きな仕事としてある。これは、高田が自ら原紙を切って刊行し続けた。第一号は一九二〇（大正九）年八月一〇日刊。以来、不定期刊ながら、一九三三（昭和八）年一〇月二五日刊行の第五七号まで続いた。この雑誌について、飯倉義之は、前出論文で「当初より高田は郷土研究・民間伝承に絞った冊子を刊行するつもりはなく、自らの興味の赴くままにガリを切り、人にも分けていたとみるのが正しいだろう」とし、その「発信・交流」のいとなみを、今日の「インターネットのブログ」に準えている（なお、平井及

び飯倉によると、謄写版『なら』は自筆雑誌『奈良雑筆』を母体にして、その抄録からなっているらしい）。

『なら』を読み進めていくと、高田の「興味の赴くまま」を見取することができるが、そこに気づかれるのは、当時住んでいた「大和」と高田の出身地の「小河」との記事が多いことである。高田は、貪欲に各地を旅したけれども、「大和」と「小河」とが高田の記事の二本柱なのである。それは譬えていうならば、柳田國男の生まれた辻川と少年期に移り住んだ布佐との関係に近いのではないか。比較の目を養ったという意味で。とりわけ、「ことば」について、それがいえる。柳田國男は、『随筆民話』の「序」で、「目で視、耳で聴いた話を其ま、書き留めて居る」と評価しているけれども、思考方法の基礎として「語彙」に拘った柳田のいうここでの「其ま、」とは、高田の「ことば」への執着を大きな指標としての評言だったろう。なお、最初は奈良の記事が多かったのが、次第に小河の記事が増えていく。そうして、小河の方が、高田にとって親しみ深い土地だったようだ。そうしてそれは、「大和」（あるいは「奈良」）が大きい地域に広がったフィールドであるのに、「小河」が小字の地名であることから窺えよう。

二、「大和の方言」に始まる

さて、『なら』第一号の目次をみると、

わかくさ山上より（見取図）／興福寺境内地名一覧／南円堂鐘銘／大和の方言（其二）／大和習俗雑話（其二）／日誌／正誤

の記事がある。さっそくに、「大和の方言（其一）」をみよう。まず、序として、

大仏、春日ト、「ミカサ山」（若草山）ト、「オンマツリ」（春日若宮祭）ト、地震ノナイコトト、更ニ常食ノ茶粥トニ、他国人ノ思及バヌ誇リヲ感じテキル大和人ハ、マタ、ソノ言語ニツイテ「大和言葉ニサンウツナ」トノ諺ヲモツテキル。「サンウツ」トハ、「非難スル」、「ケチヲツケル」位ノココロデ、大和人ニトツテ、大和言葉ガカウ感ゼラレルノハ、不思議モアルマイガ、他国人ニトツテハ、随分註釋ヲ要スルモノガ、他地方ト同様ニ、イクラモアルノガオモシロイ。

と記される。大和のことは、つまり「大和の方言」について、大和の人々はこれを自明のもののように考えているが、「他国人」にとっては註釈を要し、「他地方ト同様ニ」多くの方言があると、冷静に眺めているのが分かる。これは、高田じしんが「他国人」であるがために、大和のことは距離を持って捉え

ているのだろう。郷土人のお国自慢とは違う、ことばの記録である。

そうして、ここでは「(1) 挨拶応答の類」「(2) 感詞」が掲出されるが、その事例紹介に続いて、高田のそのことばに対する評価が示されるのが、おもしろい。たとえば、

子供ガ何か貰ッテル時ニ、父兄ナドガ居レバ、傍カラ、「モー、やらんといて くだはれ、」(ヤツテ下サルナ)、ト忙ガシク繰返シ、念ノ入ッタノハ手ヲ遮ルヤウニシ、ソノウチ、「さうでツカ、毎度ありがたう、」ト ツケ加ヘル。礼ノ詞ヨリモ、前ノ詞ニ特ニ力ヲ入レル所ガ 耳ニサワル。

どこか、芝居の台詞を思わせるような記述だけれども、おそらく高田じしんが経験したことを記しているのではないかと思われる。それというのも、「大和の方言（其一）」の題名の上に、「正彦」と書かれた子どもの上半身の絵が描かれていた。高田の子どもの「正彦」の自画像だろう。『なら』を読む楽しさのひとつは、高田の仕事を周りで興味深そうに眺めていたであろう子どもが、時折り、微笑ましい絵で参加している。そんな子煩悩の高田が、周囲の市井人の言動に耳を澄まし、目を凝らして、その暮らしぶりを観察しているさまが、「念ノ入ッタノハ手ヲ遮ルヤウニシ」と身ぶりに言及し、また、親が「モー、やらんといて くだはれ、」ということばに特に力をこめるのを

「耳ニサワル」と感想を述べるなどから、窺える。一方、「耳ニサワル」という感想は、大和の風土に溶け切らずに「他国人」として生きる高田だからこそ感じられるものだろう。同様に、「肯定ノ相槌」では、

極メテ早口ニ四回ヅツ カサネル、「そーくくくく」。
殆ンド「そそそそ」ト聞エル、随ツテ、ハジメハ頗ル軽
薄ニ感ゼラル。(ヤヤ下ルト、「せやくくく」)トナ
ル、「然ウヤ」ガ、ツマツタ詞。

とある。「ハジメハ頗ル軽薄ニ感ゼラル」は、高田が大和に住まい始めたころのすなおな感想だったろう。大和に興味を持ち慈しみながらも冷静に他所と比較して判断するのが高田の持ち味だと思ふ。なお、「其一」では、随所に「関東では」と関東方言との比較が示される。これは、高田の早稲田大学遊学と関係があるのだろうか。

さて、「大和の方言」は、民俗を紹介した「大和習俗雑話」と並んで、第一号から連載を予定していたことが、それぞれ「其一」とあることから分かる。事実、高田の「大和の方言」は、第二号「其二」(一九二〇(大正九)年九月一日)に「(3) 声音ヤ、勢ヲアラハス語」が、第三号「其三」(同年九月二五日)に「(4) 挨拶の一例」が、第四号「其四」(同年一月五日)に「(5) 立ばなし」が続いて掲載される。そうして、

そこからちよつと間が空いて第七号(一九二二(大正一〇)年三月)に飛んで其五として「(五) 女生徒の対話」が載ったのを最後とする。第二号のは、オノマトペの単語の羅列だが、高田の故郷の小河のことばと、「井上嘉三郎君」による「三河渥美郡田原町地方」のことばとが対照されている。比較の目的勝った特集といえる。これに対して、第三号以後は、一連の「対話」の中にことばを置いて紹介する。これは、「話」を紹介するのに連なる存在だといえよう。しかし、実はこれらの例は、全て高田以外の人の手になる記録である。挨拶の短い一文やオノマトペの単語の記録であるならば他国人・高田の手によっても可能だろうが、一連なりの対話をことばの記録として残すには不十分だったのであろう。第三号の「(4) 挨拶の一例」は、「なら」を送付したことに對して「此地出身デ、イマ東京ニキル坂田末蔵君」から送られて来た「純大和方言」の「挨拶状」を掲載したものである。第四号の「(5) 立ばなし」は、「山辺郡、波多野村、大字中峯山の馬場直道君ガ、ソノ地方の婦人ノ立バナシヲ、方言テ送ツテ」来たのを掲載したものである。馬場直道は春日小学校の教員だという。第七号の「(五) 女生徒の対話」は、「北葛城郡、高田町の女子小学校の生徒「前田その」といふ子の短文・教室に入るまで」を、その学校の訓導 保川君(庄司)から、紹介された」ものである。これらの資料には、それぞれに高田のことばの註解が付け加えられている。

これらの「大和の方言」中の対話の集め方や掲載経緯の紹介のしかたは、飯倉義之が前出論文で紹介している『随筆民話』の「民話」の伝承経路の紹介のしかたに似ている。あるいは、野村典彦の前出論文での、『大和の伝説』（一九三三（昭和八）年）や『随筆 山村記』（一九四三（昭和一八）年）などについて「聞き取りの場を窺うことのできない「報告綴り」をもとに伝説集を編纂するにおいても、この頃の高田は徹底して「報告者の名」に意味を見出していた」と述べる事情とも通底していた。そうして、「大和の方言」にみえる「報告者の名」は、高田の個人雑誌『なら』の読者のネットワークに連なる名前であったり、高田の奈良師範学校教員という立場を生かした小学校ネットワークに連なる名前であったりしたようである。ここでは「(5) 立ばなし」全文を掲げてみよう（高田の註釈は省く）。

甲『きんの 春日の学校で、高田先生ちゅーシトの はな
しや あったんやげなのー。』
乙『ああ、せやげな。こちらの おとつアんらも、いてん
が……。』
甲『どんな話、しゃったんやらのーおらいきたかってんけ
どのー、つれやなかつたんで、よいかんでんて。』
乙『そやったんかい。なんせ、面白かつたらしでえ。』
甲『どんな はなししやったんやら。』

乙『えろ・話してやったけど、おとつアんの、あんな・
ききはつりの、はつちよみーとこの はなしや、なんぼ・
きいたかつて、わからひんわ。』

甲『そんなでも、ちヨツと、なツと、云うとくれ そ。』

甲『なんせのー、えッぱい 云うてやったけど、分らひん
わ。こーツと、なんたら 云やツたでよ、『餅で おしだ
す去年ぐそ』たら 云うて やツたでえ。アハハハハ。』
甲『そんな きたなえ はなし ばツかり やったんや
ろか。』

乙『せやらひんらし。まだ、えツかど・云うてやったけど、
きかな おこりやるし、きいたかつて、とびくで わか
らひんし、けたわ。』

甲『そやったんかえ。そして、おまへや ほん・『去年ぐ
そ』たら云うの・おぼえて あるだけかえ。』

乙『やッぱり、わが聞いたことやなけら、わからひんわ。』
乙『お前とこのおとつアん、おとて どこへ いきヤツ
たんで、東むいていきヤツたてのー。』

甲『ああ、あれの、上野いきしヤツてんが。きんにヨ、雨
に おうて かへってきヤツて、まんぢユのうへへ、さか
なの しるア かつて、どっこへも、やられひんでんが
……。』

おそらく、ここに出てくる「高田先生」とは、高田十郎のこ

とだろう。春日小学校に講演に赴いた後、右の対話の事例を添えて、馬場直道から礼状として送られて来たものではなかったろうか。高田によると、「嘗て同君ノ勤メテ居ル同村ノ春日小学校デ、高田某トイフ人ノ講演ガア」り、その翌日の甲（三〇歳くらい）乙（四〇歳くらい）の婦人の会話を記録したものが送られてきたのだという。高田の遠慮なのか、講演者について「某」としている。ひよつとすると、その講演では「方言」に纏わる話題もあり、それが馬場にこの対話を記録させるきっかけになったのではなかったか。

それはさて、昭和初期に柳田國男や東條操らが主導して方言研究が組織化されていったという方言研究史からするならば、これらはちよつと早すぎる連載だったということになるのかもしれない。

三、「播州小河の方言」から

「方言」という語が、『なら』の目次にもう一度出てくるのは、ずいぶん経ってからとなる。それは、一九三〇（昭和五）年一〇月の第五三号掲載の「播州小河の方言（一）」である。そうしてそれは、第五四号（一九三〇（昭和五）年一月）の「播州小河ノ方言（二）」、第五五号（一九三一（昭和六）年一月）の「播州小河ノ方言（三）」と連載され、続く第五六号（一九三二（昭和七）年五月）の「播州小河地方の昔話（百八

則）」に接続する（『なら』は、続く第五十七号（一九三三（昭和八）年十月）を以て最後となる）。

大正中期の「大和ノ方言」が他国人の耳に奇異に聞こえたことばの記録であるならば、昭和初頭の「播州小河ノ方言」はいわば郷土人の耳朶に染みついたことばの記憶の記録であったといえる。

いまま少し、両者を比較し、続いて特に「播州小河ノ方言」に注意してみよう。「大和ノ方言」は其一から其五まで五回の掲載だったが、その一回ごとの分量は少なく、都合一四ページに過ぎない。また、全体に何かを系統的に説明しようとするのではなく、いわば時々のトピックとして方言が紹介されている。これに対して、「播州小河ノ方言」は「播州小河ノ方言（一）」が四八ページ、「播州小河ノ方言（二）」が一六ページ、「播州小河ノ方言（三）」が一六ページの都合八〇ページに及んでいる。また、「播州小河ノ方言」は、高田の出身地である「播州小河」の方言を系統的に紹介しようとしている。また、『なら』一冊が三号続けて、日誌的な記事を除くとそれだけの特集になっている。

「播州小河ノ方言（一）」では、まず、小河地方の土地のようすが「（一）播州小河」と「（二）明治二十年代の小河」に自分の見聞を織り込みつつ一二ページ半にわたり二段書きで記述され、続いて「（三）小河方言ノ総則」が五ページ半にわたりこれも二段書きで記述される。それによると、高田がここで紹介

しようとしたのは、高田じしんが兵庫県赤穂郡矢野村小河に過ごした少年期の明治二〇年代の方言だということである。また、「(三) 小河方言ノ総則」は、全部で四七の箇条書きから成っており、なかなか詳細である。しかし、総則のひとつひとつをみると、方言の文字表記や用言の活用などで国語学、国文学上の知見を取り入れていると同時に、高田の個人的な感想も多く認められる。いくつか挙げる。

一、普通ノ日本音ハ、マツスベテ操ラレ得ル。播州人ハ、何處ノ言葉デモスグ真似ルトノ諺ガアル。

一、尊敬ノ助動詞、「レル」、「ラレル」ハ、行ナハレテハ居ルガ、聊カカドバツタ感ジガアリ、受身、可能ノ意味ガ、先ニ立ツ。私ハ、明治二十一年頃カニ、西三里ノ船坂村ノ従兄高橋八十松（後、柏井道彦）ガ、用ヒテ居ルノヲ聞イタノガ、初メテデ、異様ニ感ジタノヲ覚エテ居ル。

一、小河デハ、上方一般同様ニ、物ヲ言フノニ、句切りニ近ツクト、急ニ調子ガ下ツテ、尻ガ殆ンド消エテシマフ。関東人ナドノ如ク、終リマデ、明瞭ニ、乃至尻上リニ物ヲ言フノニ比較スルト、実ニ菌痒イ様デアル。

このような総則に続いて、「(一)」には八条からなる「凡例摘要」が示され、いよいよ方言そのものの記述が始まるが、それは「(四) 身体」「(五) 身体(補遺)」「(六) 身体の動作」が

四段書きで記述される。「(四) 身体」冒頭には、「身体各部ノ名称、内臓、分泌物、排泄物等。順序ハ、大体上カラ下ヘ」とある。以下、語彙とその意味の羅列が続くが、高田の真骨頂はことばの意味以上に、時おり付される解説にこそある。たとえば、「ツワ(唾)」の解説は、延々およそ一ページに二二項目の解説が付されている(「(五) 身体(補遺)」には、さらに二二項目の「ツハ」の解説が追加されている)。そこに示されているのは、俗信や噂、世間話などである。

俗信としては、便所の神様が大便小便を左右の手で受け、唾は口で受けるから大便所には唾を吐かないなどの類が多く紹介されている。噂や世間話としては、特に、高田の家族に纏わる話が散見される。たとえば、「チブサ(乳房)」の項には一つだけ解説があるが、

我が祖母やゑハ、——ガ特ニ大キク、カツテフタゴラ生ン
夕時ナド、二人ノ子ヲ一時二負ヒナガラ、一ツヅツノ——
ヲ、肩ゴシニ投ゲ与ヘテ居タト語伝ヘラレル。

とみえた。また、笑話じみたものも多くあり、たとえば、「シヨンベン(小便)」の項には一七の解説があるが、その中に、

婦人ノ——ノ音ハ国名ニツガ重ナル。「キシュー、タンバ
くくく」。

という話が見える。また、「クソ（大便ノ卑語）」の項には、一六項目の解説が付されているが、その中には、

△父ノ、ヨク聞カセタ昔話ニ、或客ガ、大根ノ味ヲホメテ、
「オ内ノ大根ハ、コエガ、ヨウキイトルンデ、オイシイ。」
トヤツテ、一座ノ興ヲサマシタ。物ノ言ヒ様モ場合ニヨル。
△昔話ノ一ツ。西行法師ガ、旅デ野屎ヲシタ。スンデカラ
見ルト、萩ノ枝ニカカッタ物ガ、枝ノ起キルニツレテ、ポ
イ／＼トハネラレテ、誠ニヲカシイ。一首浮ンダノハ、「西
行ハ、ナガイ旅モシテミタガ、萩ノハネグソ、今ガ見ハジ
メ。」誰ニキイタコトモ覺エナイ。

と「昔話」ということばが見える。いったいに、高田による身体語彙の解説は、どちらかというと汚かったり、下がかった語彙について詳しい。先の「ツハ」には、「△夫婦ノ行ヒ始メ、——ヲ局部ニツケテ、円滑ヲタスケルコトガアル」などと、まことに誠実に記している。これが興味本位の記述などではなく、研究としてありのままに報告しようという態度から発したものであるのは、孔版に淡々と示された筆跡からも相違ないと思う（高田が「ツワ」に執着したのは、柳田國男「唾を」〔方言覚書〕所収、初出一九二九（昭和四）年『岡山文化資料』、『柳田國男全集』第一三卷、一九九八年、筑摩書房刊を参照した）

を読んで影響を受けたのであろう）。

続く第五四号の「播州小河の方言（二）」には、「七、身体裝飾」「八、身体自然ノ変化」「九、親族」が四段書きで紹介されている。「七、身体裝飾」の冒頭には、「身体ニ、直接若干ノ加工ヲシテ、裝飾トスルモノ、及ビ、ソレニ関係スル事物」と記述されている。また、第五五号の「播州小河ノ方言 ソノ三」には、まず新たな「凡例」が二箇条二段書きで書かれてあり、続いて「十、身分」が「○総称」「○地位」「○特殊ノ地位」「○公事関係者」「○農業」「○工業」「○商業」「○芸人」「○雑業」「○物貰ヒ、及ビ下層生活者」「○詐欺盜賊」「○人柄」「補遺○総称」に分かれ、一から三〇九までの通し番号を付して紹介されている。「十、身分」の冒頭には、「所謂「人倫」デアルガ、人倫トキケバ、我々ハ幼時ノ先人カラ「人倫五常」等ノ字義ガ聯想サレテ、「人トシテノモノガラ」ト云フ意味ハピツタリト感じニ乗ツテコナイ。ヨツテ、コトサラニ身分ト云フ語ヲ用ヒタ」と記述されている。第五四、五五号は、第五三号に比べると、解説に噂、世間話は少なくなっているが、「十、身分」中の「○物貰ヒ、及ビ下層生活者」には、「一六三、コージキ（乞食）」の解説中に「又、一口淨瑠璃、カゾヘウタ、アホダラ経、新版判ジモノ、ナドヲ唱へ、又ハ簡單ナ芸ヲ演ジテ、物ヲ乞フノモアル」とみえる。その他、「ロクブ」や「ヒョータンコジキ」「ダイコク」「チョンガレ」「サエモン」「デロレン」「セッキョー」などの方言が紹介されているのが興味を引く。

四、東條操著『方言採集手帖』での協同作業

——昭和初頭の柳田國男

ここで、高田十郎の「播州小河ノ方言」と柳田國男らの方言研究との関係を押さえておきたい。高田十郎が「播州小河ノ方言（一）」を書き終えたのは、一九三〇（昭和五）年一〇月九日のことだった。その前々年の一九二八（昭和三）年六月に、東條操著『方言採集手帖』が郷土研究社から刊行された。文庫本の体裁でコンパクトながらも約三〇〇ページのやや厚手の書である。

その序に当たる「各位に／著者より」には、「本欄の単語集については保科（孝一—高木注）先生の方言採集簿から教へられた處が少からずありました、又人事と年中行事については柳田國男先生から材料を頂戴しました」と記されている。この手帖は、表紙に書名の右には「調査者」とあり、左には「県府 地方方言」とあって、それぞれ書き込みができるようになっていいる。また、中でも、読者がそれぞれの語彙の方言を書き込むようになっていいる。つまり、その体裁は、後年に柳田國男が試みた採集手帖類の魁となっている。

注目すべきは、「人事」と「年中行事」とが柳田國男の「材料を頂戴」したことである。これがどの程度の柳田の関与を指すのか、東條の言からは判然としない。調査すべき語彙を提

供されたのか、その調査する順番、配列にまで関わっていたのか。おそらく、後者にまで関わっていたらう、と思う。この手帖の目次をみると、本編は「単語集」として、「名詞」「代名詞」「形容詞」「動詞」に分かれている。就中「名詞」にもっとも多くが割かれている。そうして、名詞の中は、「天文」「地理」「動物」「植物」「人倫」「肢体」「住居」「飲食」「服飾」「生業」「人事」「年中行事」に一二分類されていた。このうちの「人事」をみると、これは「人生儀礼」のことだと分かる。つまり、柳田は東條の『方言採集手帖』に、民俗学の年中行事と人生儀礼の語彙採集をも含ませようとしていたのである。「人事」は「誕生（タンジヨ）」から始まって「怪物（バケモノ）」までの一二の標準欄を掲げて、読者にそれぞれの方言を記入するよう仕向けている。おもしろいのは、その配列であり、「誕生（タンジヨ）」から「七五三」までは子どもの儀礼の順序だったものが、そこから一転して「玩具（オモチャ）」に飛び、「おしゃぶり」「人形（ニンギョ）」と個々の玩具になって、さらに「遊戯（アスピゴト）」に変わって「鬼事（オニゴッコ）」「隠鬼（カクレンボ）」と個々の遊びに続くというように、連鎖が通有の「人生儀礼」に終わっていない点である。遊びの終わりの方では「謎（ナゾナゾ）」「鞆鞆（ブランコ）」「神隠（カミカクシ）」「天狗（テング）」と遊びから怪異に変化（へんげ）してみせる。あるいは結婚、妊娠、帯祝いの直後に、「嫉妬（ヤキモチ）」「喧嘩（ケンカ）」「離縁（リエン）」「遊芸（ユーゲイ）」「笛（フ

エ)「踊(オドリ)」「酒宴(サカモリ)」「遊山(ユサン)」「汐千狩(シオヒ)」「遠足(エンソク)」「祭(マツリ)」「山車(ダシ)」「祭前夜(ヨミヤ)」「縁日(エンニチ)」「見世物(ミセモノ)」「軽業(カルワザ)」と曲芸を披露する。あるいは、「人事」の最後の辺りでは、「墓(ハカ)」「変死(ヘンシ)」「水死人(ドザエモン)」の後に「河童(カッパ)」と繋げてみせる。こういう俳諧連歌に見紛う付け方は、いかにも柳田らしいといわざるを得ない。このようなことばの配列を前にすると、読者(方言の記録者)は単なることばの意味だけに止まらず、その背景にまで記しおきたい欲望にかられるかもしれない。ともあれ、柳田國男と東條操とが協同して方言採集の運動に船出したのである。

この書が各地の郷土研究者に影響を与えたのは間違いない。高田十郎が「播州小河ノ方言」を発表した背景の大きなひとつだったと思う。その「播州小河ノ方言」では、「身体」「身体ノ動作」「身体裝飾」「身体自然ノ変化」「親族」「身分」の語彙が紹介された。『方言採集手帖』に即して準えたと「肢体」「服飾」「人倫」及び「動詞」の一部になる。たとえば、「方言採集手帖」の「第六 肢体附病名」は、「頭(アタマ/ツムリ)」「髪(カミ)」「旋毛(ツムジ)」「雲脂(フケ)」と頭から始まって足に及ぶ。この配列順序は、高田のそれと一致する。高田が特に着目した「唾(ツバキ)」もある。一方で、高田は「身分」について「所謂「人倫」deal」と注した上でその語には従わず

に「身分」とするとも述べていた。これからして、おそらく高田は『方言採集手帖』を十分に読み込んだ上で、自分じしんの取捨選択、解釈をして自らの方言の報告を行なった。高田の方言採集の態度は、中央の学界に盲従するのではなく、自分なりの応用を行なったといえよう。

さて、『方言採集手帖』の刊行が機縁となり、一九二八(昭和三)年二月八日、上田万年、東條操、橋本進吉、柳田國男らによって方言研究会が設立された(事務所は東京帝国大学国語研究室)。当日、第一回方言研究会が東京朝日新聞社談話室にて開催された。その後の動きを駆け足で辿ると、三年後の一九三一(昭和六)年九月には春陽堂から雑誌『方言』が創刊される。創刊号の執筆陣をみると、「論説」は上田万年、新村出、服部四郎、柳田國男、東條操、「資料」は山口麻太郎、西村源次郎である。そうして、同年十二月に方言研究会は東京方言学会になる。『方言採集手帖』は、日本の方言調査や研究の組織化を告げる刊行物だったといえる。

ところで、一九二八(昭和三)年から一九三一(昭和六)年半ばまでの柳田國男には「孤立」ということばがしばしば用いられる。その間の事情を、柳田國男研究会編著『柳田國男伝』第一〇章第二節(永池健二執筆、一九八八年、三一書房刊)ではおおよそ次のように説明している。

柳田國男は雑誌『民族』の編集責任者を務めていたが、雑誌を発行していた岡茂雄(岡書院)らと不仲になり、第四卷

一号（一九二八（昭和三）年一月）辺りで編集責任を放棄した。まもなく『民族』は休刊になったが、それからまもない一九二九（昭和四）年七月に新たに設立された民俗学会の機関誌として雑誌『民俗学』が岡書院から創刊された。『民俗学』は執筆者や発行所をみても雑誌『民族』の後継誌であるのは間違いないが、柳田國男は一切参加していない。民俗学会を設立したのは岡茂雄、小泉鉄、小山栄三ら『民族』での柳田のし方に批判的な人たちであり、柳田の意向を無視して学会を設立したために柳田は結局、排除された形になった。そうして、永池によれば、

若い彼らが、柳田にかわる学会の実質上の指導者として祭り上げたのが、論文掲載拒否問題で柳田との仲がこじれていた折口信夫であった。そのことがまた、柳田の感情を逆撫でし、頑なに学会への参加を拒ませる一因ともなった。

という（なお、鶴見太郎『橋浦泰雄伝——柳田学の大きいなる伴走者——』（二〇〇〇年 晶文社刊）では、まもなく柳田が態度を軟化させたというが、永池は折口が柳田に配慮をしたとする）。柳田國男と折口信夫との関係について、永池はさらに詳細に論じているが、ここでは、いわゆる民俗学の研究者らから一旦距離を置いた（置かざるを得なくなった）柳田國男が、東條操らの方言研究に接近したことを確認するにとどめる。ある

いは、柳田にとつて民俗学と方言研究とは乗り換え可能なものだったらしいことを確認するにとどめる。方言研究が、現在の国語学や言語学的な領域の一員としてコンクリートされている状況に比べて、「中興」期の当時は、柳田國男の考える民俗学と重複する要素が多かつただろうことは、『方言採集手帖』の配列からも窺えた。

なお、一九二八（昭和三）年は昔話研究にとつても忘れられない年である。同年四月一日に『日本文学講座』第一六巻が新潮社から刊行された。その「科外講話」に柳田國男の「昔話解説」が発表された。これは、柳田による昔話に関する初めての纏まった論考である。私見では、これは、同講座の先行巻に発表された西条八十の童話論に対する反論を秘めていよう（高木史人「書評 武田正著『昔話の伝承世界——その歴史的展開と伝播』」（『日本民俗学』第二〇九号、一九九七年、日本民俗学会刊）が、これに先立つ一九二七（昭和二）年九月一日には、新居披露を兼ねて佐々木喜喜の『老嫗夜譚』についての雑話会を開いているから、佐々木の昔話集に触発されて著された部分もあるのかもしれない（柳田國男研究会「柳田國男年譜」（『柳田國男伝別冊』一九八八年、三一書房刊参照）。かくして、方言研究の「中興」期に民俗学就中昔話研究の「勃興」期が重なり合い、その両方を束ねる人物として柳田國男がいた（『勃興』『中興』の語については、東條操「方言と私」（『方言の研究』一九四九（昭和二四）年、刀江書院刊）参照）。

五、「播州小河地方の昔話（百八則）」へ

——方言研究と昔話研究との別離・序章

ここで再び、高田十郎の『なら』に戻る。第五六号が「播州小河地方の昔話（百八則）」特集号であり、われわれ昔話研究者にとつては馴染みあるものだが、その冒頭は次のように記されていた。

是ハ、私ノ幼年、乃至青年時代、即チ明治廿年前後、乃至卅年台ノ頃、郷里、兵庫県、播磨、赤穂郡、矢野村ノ小河、及び其附近テ聞イテ居タ昔話ヲ、集メタモノ。サキ頃カラ編纂シツ、アル「播州小河ノ方言」ノ末ニ加ヘル心算デアッタガ、又、考ヘル所ガアツテ、独立ノ一篇□シタ。外ニ性的諺ガ猶二三十則アルガ、今ハ一切省略シタ。話シ手ト、話サレタ時日トノ明カナモノハ、ソレゾレノ章末ニ、記入シタ。最近、新ニ聞込シタ者モ、皆、当時ニ行ハレタ所デアアル。

この一〇八篇の昔話報告が、当初は「播州小河ノ方言」ノ末ニ加ヘル心算デアッタ」ことに留意したい。当時、「方言」の報告と「昔話」の報告とは、親密な連関がどうやらあったようである。方言研究の資料として昔話の報告が活用される。

あるいはその反対に、昔話研究の資料として方言の報告が活用される。昭和初頭に、両研究は、共に協同して進められつつあったのではないか。それが、いつしか、「考ヘル所ガアツテ、独立」していったのかもしれない。その「考ヘル所」とは、何であったのか。方言研究と昔話研究との来し方を、今一度われわれの行く末に資するために、この研究史を企図したい。

さて、「播州小河地方の昔話（百八則）」に収められた昔話群をみると、笑話に大きく傾斜していることが分かる。まず、第一話「（一）アホムコノ謠」から第八話「（八）牛ニツキコロサレタ婿」まで、所謂馬鹿雑話が続く。続いて第九話と第一〇話とが所謂馬鹿嫁話になり、第一一話から第一七話までが「山寺ノ和尚ト小僧トノ話」所謂和尚と小僧譚となる。このように、笑話が大まかな分類ごとに纏まりながら、延々と続く。所謂本格昔話あるいは完形昔話は、第一〇二話の「（一〇二）桃太郎ノ話」から「（一〇三）又」「（一〇四）舌切雀」「（一〇五）カニノカタキウチ」「（一〇六）土舟木舟」「（一〇七）日本一の尻コキババ」まで続いているのが目立つくらいだ。これが、その地域性によるのか、編著者の高田の個性なのかは、興味がある。

兵庫県というわれわれはどうしても、井口宗平の『西播磨昔話集』（一九七五年、岩崎美術刊）を意識してしまう。一八八五（明治一八）年に兵庫県佐用郡に生まれた井口この仕事は、当地に所謂「彦八話」の系譜に連なる。その間の事情

は、同書巻末の庵邊巖による「編者ノート」と野村純一による「解説」に詳しいが、高田の「播州小河地方の昔話(百八則)」もまた、その系譜に連なるとみてよいのではなからうか。ついでにいうと、柳田國男のハナシ観や笑話観にも、彼の出身地、辻川でのハナシの特色が微妙な影を落としてはいはしなかったかと考えてしまうが、それはさて、ここではハナシの先進地域としての小河を考えておきたい。

そうして、ここでも、高田十郎は、話の出所をなるべく詳細に記している。「(二)又」(アホムコノ謡)には、「(大正一五、九、三〇・高橋姉、談)」とあり、「(三)皿ト婆トヲ間違ヘタ婿」には、「(父、光葉久吉、談)」、「(四)茶碗ト風呂トヲ間違ヘタ婿」には、「(父談) (大正一五、九、三〇・姉談)」と続いていく。話の出所は、父から聞いた話が一番多く二二話を数え、次いで姉の高橋コハマが一七話、母が六話、亡姉・光葉ジユが四話、坂本梅松、友人の池田新一が各三話、叔母・角谷ユリとアサコが各二話、従兄・高橋八十松が二話、柏木雨扇が二話、後一三人が各一話となっている。おもしろいのは、小学校で誰それから聞いたというのが七話あった。「昔話の語り合い」を想起させる。なお、同じ話に二人の名前を出している場合もあるし、その中には、「(八〇)チョーズ」(「長頭を廻せ」)のように「(父ガ村役場デ、聞イテ来タ話)」と、誰から誰へが丹念に記されたものもある。特に姉の高橋コハマとは、この特集の直前に、かつて聞いた話の語り合わせ、確認をしている

場合が複数あった。ともかく、一見して分かるのは、これらが高田の家族を中心にした親しい記憶だったことである。それゆえに、報告も「ことば」を圍繞する雰囲気までよく伝えているように思われる。たとえば、次の二話である。

(八四) イシ〜

神戸へ、少シノ間イテキタ人がアッタ。神戸ナマリヲ使ウテ、「アノナ、ワタイ ナ、神戸へ イキタイ ト 思ヒマシタ時ニナ、イシ〜 スキデ オマシタガ ナ、コッチャ へ 戻ウテカラモ、ウラ、ダンゴ ヨウ 食フ。」ト、アトハ、ヤマガノ言葉ニナツテ居タ。

(註) イシイシ 団子ノコト、神戸語。

(八五) 神戸ナマリ

神戸へ、行キタウテ ナラヌ人ガアッタ。家ヲ スケテ、途中マデ イテ、ヒキモドサレタ。「ワタイナ、神戸ヘイキタイト 思ヒマシテナ、道マデ イタラ、ツカマヘラレテ、ウラ 戻ツテ来タア。」ト言ウタ。

(註) 右ノ二ツノ話トモ、セリフ ハ、初メヲ神戸ナマリ、終リヲ、小河言葉ノ調子デ言フ。

右の二話とも伝承の経緯は記されていない。けれども、第八五話の(註)にあるように、文字からだけでは窺い知れない

会話の「調子」にまで言及しているのは、高田がこれらの話を十分に我が物として楽しみつつ、深い理解を有していたからだとはいえよう。「ワタイ」から「ウラ」へ、「イシイシ」から「ダング」へと単語が変わるだけではなく、ここでは微妙なイントネーションの違いも演じられていたのだろう。このような資料の報告に、「大和の方言」で対話の記録を他者に委ねていたのとは対照的な高田の立ち位置を、私は感じる。

それと同時に、方言採集と昔話採集との資料への手つきの違いまでも読み込むのは、深読み過ぎるだろうか。『方言採集手帖』や『簡約方言手帖』などでは、やはり単語の採集が重んじられていた。それに対して、高田の方言採集は、「大和の方言（其三）」辺りから、単語というに止まらず、対話の記録の紹介を試みていた。大和のそれは、他国人の高田にとって自らが成し得ないものだったけれども、高田は独自の方言記録の可能性を求めていたといえるだろう。そうして、やがて、方言採集への誘いが、柳田國男や東條操らの呼びかけによって（たとえ直接ではなくとも、著作物などを通して）、高田の下にもやってきたのだろう。高田は自らの出身地、小河の「方言」記録を、彼らの用意した「単語」単位の採集方法によって行なった。けれども、先に見たようなその語注・解説の「単語」単位を越えるいわば民俗性・説話性（『随筆民話』性といってもよい）とでも名づけられるべき記録への志向（試行・嗜好）は、そのまま、高田の方言採集を「単語」単位の傾向が強かった世

間一般の方言採集から突き抜けさせて昔話採集へと（それも高田の場合は「笑話」中心のへと、だけれども）赴かせたのではなかったろうか。しかして、この志向（試行・嗜好）の違いは、やがて、方言研究と昔話研究とを一身に束ねていた柳田國男の在りようを離れて、それぞれが別の道を歩んでいく一因ともなったのではないか。これは「高田十郎の場合」というだけではなく、昔話研究史一般の問題としてさらに考えてみたいことである。

（付記） 小論は、二〇〇九年六月七日に日本口承文芸学会大会（於・奈良教育大学）研究発表での配布資料第一節・第二節を増補・改稿したものである。続く橋正一について、國學院大学方言研究会については、スペースの関係上割愛した。これらは改めて別の機会に論文として公表したい。発表時に意見を下さった方々にお礼申し上げます。

なお、小論は、二〇〇七年度名古屋経済大学在外研究（私学研修員として東京大学文学部に一年間滞在。指導教官・佐藤健二教授）の研究成果の一部である。お世話になった方々に感謝申し上げます。

（たかぎ・ふみと／名古屋経済大学）